



東京外国語大学 国際日本学研究院
2019年度 連続講演会

場所：東京外国語大学 研究講義棟 101 教室

時間：17：45-19：15（90分）

10月25日（金）

Importing Cool Japan

Daniel Otto

(VIZメディアスイス)

Tom Mes

(ライデン大学)

11月11日（月）

おみくじの世界

平野多恵

(成蹊大学)

F.ギギ

(ロンドン大学 SOAS / TUFS)

身近な世界から
学問へ

2020年

1月23日（木）

海を越えて活躍する声優

—2か国で、声で演じるということ—

劉セイラ

(声優)

12月16日（月）

ニュースの伝え方

—やさしい日本語でできること—

山屋頼子

(NHK News Web Easy 制作スタッフ)

2020年2月6日（木）

徹底的にモダンでなければならない

—ル・コルビュジエに見るモダニズムと

東京ジャパン江戸近世—

長田年伸

(デザイナー)

T.スクリーチ

(ロンドン大学 SOAS / TUFS)

2019年度 連続講演会「身近な世界から学問へ」第1回

Importing Cool Japan

講演者：Daniel Otto (VIZ Media Switzerland /VIZ メディアスイス)

場所：101 教室 日時：2019年10月25日(金) 17:45～19:15

Animation/anime and manga, in other words popular culture, are among the main factors of Japan's soft power approach. In his talk, Daniel Otto, Vice President Acquisitions and Sales at the biggest anime and manga distributor in Europe, Viz Media, gave a historical review of anime's entry and meteoric rise into European markets as part of 'Cool Japan', and also shared various interesting anecdotes from his long career in film import and programming in Europe, with a focus on Germany. Toei Doga's first productions, such as *Hakujaden* (1958) explicitly aimed at opening international markets for anime. Yet, divergent perceptions of anime as directed at children initially led to a clash in expectations and audience reaction, for instance regarding violent or explicit scenes. As for the Germany market, co-productions or productions on commission provided a feasible way, and one of the most surprising insights gained for the international attendees was that classical anime, such as *Chiisana baikingu bikke* (1972), *Arupusu no shōjō Heiji* (1974), *Mitsubachi maya no boken* (1976), or *Nirusu no fushigina tabi* (1979) were actually *Japanese* (which surprised our European students who grew up watching them), and would not have been possible without *German* ideas or money (a fact previously unknown to many Japanese audiences). VHS, the rise of digital and the demise of packaged media subsequently changed the markets until the recent consolidation of the international anime business with and without Japanese financial backing. Insightful comments by Dr. Tom Mes, a specialist in Japanese film and media from Leiden University (Netherlands) and questions from the audience concluded this thought-provoking lecture, combining industrial and academic viewpoints, about popular culture as a transnational business, a soft power, and a medium that crosses borders and connects people.

(文責：イリス・ハウカンブ)

2019年度 連続講演会「身近な世界から学問へ」第2回

おみくじの世界—神仏のお告げを読み解く—

講演者：平野多恵（成蹊大学）

場所：101 教室 日時：2019年11月11日（月）17:45～19:15

日本に来たことがある誰もが一度は引いたことがあると思われる最も身近な占いであるおみくじに、「おみくじ案内人」を自称されるおみくじ研究の第一人者平野多恵氏が学問の光をあてる。おみくじの構造の解説から始まり、中国の『天竺靈籤』をそもその起源として、南北朝・室町期に日本に伝来し、徳川家康が重んじた天海僧正が元三大師良源を信仰したことから、それが「元三大師靈籤」となり江戸時代に日本に普及したという歴史的な経緯を説明する。おみくじの構成要素として重要な和歌について焦点を当て、和歌が本来人と神とをつなぐメディアであったので、おみくじの重要な要素となったことを説明する。和歌による占いである「歌占」も紹介する。さらに、そもそも中国を起源とした漢詩のおみくじとの関係にも触れて、両者が併存していた状況を概観し、神仏習合から神仏が分離した明治維新の後に神社系のおみくじで和歌系が優勢になったという変遷をたどる。和歌が優勢になった背景として、女子の教化を目的とした団体「女子道社」という組織が、おみくじ制作会社として活動したことにも焦点を当てる。最後に、ご自身も関わる現代におけるおみくじの展開、特に歌占の復元的実践について述べる。講演後、ロンドン大学 SOAS/本学 CAAS ユニットのファビオ・ギギ氏により、日本における物を介した信仰という点から質疑とコメントがあり、興味深い話題が展開した。

（文責：村尾誠一）

2019年度 連続講演会「身近な世界から学問へ」第3回

ニュースの伝え方—やさしい日本語でできること—

講演者：山屋頼子（NHK NEWS WEB EASY 製作スタッフ）

場所：101 教室 日時：2019年12月16日（月）17:45～19:15

2012年4月1日より、日本放送協会報道局（NHK）では、ニュースの提供のしかたとして、やさしい日本語を用いた「NHK NEWS WEB EASY」を立ち上げた。第3回の講演会では、この「NHK NEWS WEB EASY」の立ち上げ以来ずっと携わってこられたスタッフの山屋頼子氏にお越しいただき、その日々の業務について、また、このお仕事に携わった経緯についてお話をうかがった。

やさしい日本語は、1995年1月に起きた阪神・淡路大震災をきっかけに、外国人への情報提供方法の1つとして始まった取り組みである。今回の講演のトピックである NHK NEWS WEB EASY は、2011年3月の東日本大震災を機に立ち上がったサイトであるが、日本語学習途中の外国人だけではなく、子どもなどさまざまな人にとってわかりやすい形でニュースを伝えてくれている。山屋氏は、製作スタッフとして、ニュースをどのように「やさしく」書き換えているかというテクニカルな点のお話に加え、以前日本語教師をなさっていた山屋氏が、この仕事にかかわった経緯についても、お話しくくださった。

講演後、指定討論者として本学の荒川洋平教授にご登壇いただき、やさしい日本語が社会に果たす役割について、山屋氏とともにディスカッションをしていただいた。

ニュースは日常生活に当たり前にあるものだが、その身近な世界にあるはずのものに手が届きにくくなっている人たちがいること。その人たちを支えるために学問ができることは何かという点からも、身近な世界と学問を結ぶ講演であった。

（文責：石澤徹）

海を越えて活躍する声優—2か国で、声で演じるということ—

講演者：劉セイラ（声優）

場所：101 教室 日時：2020年1月23日（木）17:45～19:15

昨今の日本語学習者の中には、アニメをきっかけに日本や日本語に興味を持つ人が少ない。ご登壇の劉セイラ氏も、日本のアニメが好きで日本語学習を始めたひとりだが、今では日本と中国両国で声優として声を使った仕事をなさっている。

講演では、劉氏が声優という仕事に興味を持ったきっかけとなったアニメのこと、また日本語学習において努力したところ、困ったところ、また、日本で働くということを意識してふるまっていた劉氏に声をかけ、そのままいいと教えてくれた先輩声優の話など、ご自身のライフストーリーを軸にしながらも、留学生のみならず、これからのキャリアパスについて考えている学生に寄り添う形で、ユーモアを交えながら語り掛けてくださった。

講演後は、国立国語研究所／本学 NINJAL ユニット准教授の朝日祥之氏にもご登壇いただき、キャラクターを演じるという点から役割語や日本と中国におけるキャラクターのつくり方の違いなどについて、興味深い議論が交わされた。

なお、このときの様子は、2020年3月29日付の朝日新聞にて、劉氏の密着取材を行っていた佐藤達弥氏の記事の中でも触れられていることを申し添えておく。

（文責：石澤徹）

2019年度 連続講演会「身近な世界から学問へ」第5回

徹底的にモダンでなければならない

ール・コルビュジェに見るモダニズムと東京ジャパン江戸近世ー

講演者：長田年伸（装幀／編集／執筆）

場所：101 教室 日時：2020年2月6日（木）17:45～19:15

長田氏は現在、本のデザイン／編集をメインに、主にエディトリアル／グラフィックデザインの分野で活動されているが、近年はモダニズム建築の巨匠と呼ばれるル・コルビュジェについても様々な活動を行っている。特に2018年にはスイス大使館が発行した『スイス・デザイン・ストーリーズ』で「ル・コルビュジェが見た日本」稿を執筆、さらに2019年には国立西洋美術館で行われたスイスカルチャートーク「ル・コルビュジェの遺産：スイスの建築設計事務所 クリスト&ガンテンバインの解釈」にて、エマニュエル・クリストと対談も行っている。

本講演ではまず、サヴォア邸を始め、ユニテ・タビタシオン、ノートルダム・デュ・オー一礼拝堂、国立西洋美術館など様々なコルビュジェの建築を外観、内部、それぞれに機能性も含めたデザインを紹介しつつ、彼がそこで何を体現しようとしたのかを解説した。そして、その流れの中でコルビュジェのモダニズムについても検証をおこなった。長田氏は、モダニズムは近世への否定の上に成り立つが、同時にそこには自身が否定したもの（スクラップ）に組み込まれるという根源的な矛盾が存在している一方で、日本では内発的な革命が起こらなかったことで、スクラップが不在となっている点がユニークであると分析した。講演後のタイモン・スクリーチ氏（ロンドン大学 SOAS／本学 CAAS ユニット）との対談ではヨーロッパ建築の歴史や日本にける建築様式の独自性など、さらにモダニズムに関する議論が深まった。

（文責：伊東克洋）

一日セミナー・ワークショップ「日本語教育におけるテストと評価」

講演者：伊東祐郎（東京外国語大学名誉教授、国際教養大学教授）

場所：留学生日本語教育センター103 教室 日時：2020 年 2 月 3 日（火）10:30～16:10

昨年度まで本学にいらっしゃった伊東祐郎氏をお招きし、午前にご講演、午後にはワークショップを実施していただいた。

午前のご講演では、文部科学省の委託業務として伊東氏が開発に携わった「外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA」について解説をしてくださった。理論的背景はもちろんのこと、開発時の経緯についてもその試行錯誤について伺うことができ、評価の重要性とその難しさを改めて感じる事ができた。

午後は、学内外の日本語教育従事者、大学院生に対して、読解テスト作成のワークショップを実施していただいた。評価法がご専門の伊東氏のリードのもと、Can-do 評価や信頼性が高く、妥当性も高いテストとはどのようなものかについて、グループワークを通して実践的に学び直す事ができた。

なお、午前午後通して、のべ 50 名程度が参加する機会となったこと、また、多くの現役日本語教師が参加し、それぞれの職場での試験や授業について意見交換できたことは、大学院生の今後のキャリアパスに対しても、大きな意義があったと考える。

（文責：石澤徹）

ワークショップ「業務遂行の円滑化のための情報管理マネジメントに関して：
日本語教育関連業務を例に」

講演者：クリシナムルティ・アルドチェルワン

(Rapyuta Robotics 株式会社 代表取締役)

場所：留学生日本語教育センターさくらホール 日時：2020 年 3 月 11 日 (水) 14:00～16:00

本ワークショップは、多種多岐にわたる教員の業務をどう効率的に進めることができるのかをテーマに、企業を中心に情報処理マネジメントを行うとともに、進んだ技術活用を支えてきた経験を持つ講演者のクリシナムルティ・アルドチェルワン氏（本学留学生日本語教育センター2004 年度学部進学留学生（1 年コース）修了生）より、アドバイスやヒントをいただくという趣旨で行ったものである。

ワークショップでは、①講演者自らの日本での学びと起業、②我々を取り巻く環境の転換、③大学業務の効率化のヒント、について非常に親しみの湧く語り口で、多くの例やデータの提示とともに明快な解説がなされた。解説では、氏が共同経営をしている Rapyuta Robotics 社が行う物流関連企業における AI 活用による複数ロボットと人の協働、現在の産業界のキーワード、「ソフトウェア」「クラウド」「AI」を制する者と従属する者との分断が急速に進むであろう近未来の予測、業務効率化には「コアバリュー（CORE VALUE：意思決定基準となる組織内価値の設定）」の共有が鍵となることが示された。さらに、使いやすいクラウド・AI ツールとして、複数のメンバーの編集やコミュニケーションを効果的に助ける Google Docs や Slack の紹介もなされた。後半 20 分ほどの質疑応答の時間には、会場参加者からの積極的な情報確認や質問、相談に対して丁寧な説明やコメントがなされ、全体として非常に有意義な会となった。

なお、企画当初は学内外の教職員や学生、一般の参加者を迎えての講演会として開催予定であったが、新型コロナウイルス感染症の広がりによる今回の対応策として、対象者を国際日本学研究院等の教員に限定、申し込み制（当日マスク着用）として実施した。

（文責：鈴木美加）



◆略歴

2005年 東京工業大学(学士/制御システム工学)入学
2009年 コロンビア大学(修士/金融工学)入学
2010年 野村証券入社 エクイティ・デリバティブ・ストラテジストを担当
2013年 野村証券を退社
2013年 16億円のヘッジファンド Fund of Tokyo 設立
2014年 当社代表取締役 COO に就任(現任)



クリシナムルティ アルドチェルワン

Rapyuta Robotics 株式会社 代表取締役

(本学留学生日本語教育センター1年コース 2004年度修了生)

2020年3月11日(水) 14時~16時

東京外国語大学 留学生日本語センター
(JLC) さくらホール

問合せ: 鈴木美加 mika[at]tufs.ac.jp

業務遂行の円滑化のための情報管理マネジメントに関して： 日本語教育関連業務を例に

国際日本学の一分野である日本語教育学に携わる日本語教育関係教員は、多様な留学生に対する日本語教育コースの運営を担当するとともに、学部、大学院の幅広い業務を担当する。教育、研究、運営の多様化に伴い、個々の教員の情報処理能力・スキルは、日本語教育のみならず、大学において必須であり、また日本の大学の事務処理能力の重要性は、他国とは事情が異なるとも言われる。このような中、どのようなマネジメントを行うと効率的に作業を進めることができ、かつネットワークがうまく構築できるのか、について、企業を中心に情報処理マネジメントを行い、かつ進んだ技術活用を支えてきた経験から、アドバイスやヒント提供をお願いすることは、国際日本学関係者に役に立つと考える。